

受領者投稿

研究のサイクルとゴール

東北大学 電気通信研究所 教授 塩 入 諭
(第13回受領者)

研究助成のための研究計画書には、その研究の意義が説得力をもって書かれていけないと思うが、筆者は、ゴールの設定という点で居心地の悪さを感じることが多い。研究計画に目標があるのは当然であるが、そこまでの道のりが見通せているのであれば、研究することがあるのであろうかと思ってしまうし、見通せない場合は具体性のない記述になりがちである。指導した学生から、研究が、仮説構築とその検証のサイクルであることが体験できたという感想をもらったことがあった。実際それが研究者の日常であると思うが、このサイクルとゴールの関係はいつも明確ではない。仮説検証のサイクルは永久に続くように見えるが、研究計画にはゴールが必要である。

立石科学技術振興財団から助成していただいたのは、「視覚的注意の捕獲現象の研究」という研究テーマであった。当時は、なんとか視覚的注意の動きを実験的にとらえ、その成果が上がりつつある時期であり、このテーマも注意の位置を測定するために考えていた。研究助成のおかげもあり、いくつかの興味深い成果を上げることができた。現在は、それらの成果に基づき、自然画像の観察時などより日常正確に近い環境で人間の注意を測定する、さらにそれを予測するシステムを構築することを目標に研究を進めている。こう書くのは簡単であるが、実現は非常に難しい。画像中の目立つ対象をみつけ

ることは、視覚特性を考慮して画像処理をすることである程度は可能である。しかし、我々が注意を向ける対象は、何をしようとしているか、そこで何が重要かに

大きく依存するし、個人差の影響もある。これらの問題をひとつひとつ解決する必要があるし、その前に問題を分析する必要もある。暗中模索状態といえないこともないが、それでもいまままでに得ることができた手掛かりを元に、研究を進めている。

さて、研究のゴールの話をもどすが、申請書にはこのテーマは運転時の安全性やインターネットなどで適切な映像呈示を行う上で重要であると書いた。これはその通りだと思っている。しかし、実際の研究成果を実用的なものに繋げるには、さらに多くの時間がかかるし、見通しのよい話でもない。それでも基礎的研究の場合、その意義を具体的に示すためにこの種のゴールについて述べることが多い。立石科学技術振興財団においては、おそらくはこのような点もご理解いただいた上で、助成をしていただいたものと思ひ、その意味でも大変感謝している。また今後もそのような点を考慮して基礎研究についての評価をしていただければと思う。

